令和４年度　学校運営評価外部委員会　議事概要

日　時：令和５年３月 23 日（木）　14 時 00 分～16 時 00 分
場　所：よこはま看護専門学校　分館 101 教室

１．校長あいさつ

○　この委員会の位置付けは、「大学等における修学の支援に関する法律」に基づき授業料や入学金の免除等を行う、新たな就学支援制度が令和２年４月から開始されたことに伴い、対象校として確認を受けるための要件の一つとして、学校関係者評価があげられた。そのため、本校においても令和元年度から設置したものである。

本日は、「2022（令和４年）年度　学校評価報告書」に基づき、今年度の報告を行う。忌憚のないご意見をお願いしたい。

２．教職員紹介

伊藤看護科長より、配布資料の確認、委員紹介

３．「2022（令和４年）年度　学校評価報告書」について

【加藤副技幹】

配布資料に基づき、１．教育活動、２．学校運営について報告

○教育活動について

・　「ヒューマンケアリングに基づいた内容」「より実践に近い環境を整え、学習促進を図っている」と委員よりご意見があった。次年度は、新カリキュラム２年目で各看護学が中心となる。臨床判断能力の育成を目指し、学生が主体的に学習できるよう教育方法の工夫を行っていく。

○ICT の推進について

・　「Wi-Fi の環境整備が早急に必要」、「医療者として情報を取り扱う倫理観の醸成が重要」という意見があった。

・　次年度５月にクラウド型学習支援システムを導入する予定である。本校では県の内部統制の基本方針のもと、リスク管理会議を設置している。看護職として責任をもち行動できるよう運用方法、指導体制を強化していく。

○感染予防策を講じた安全かつ円滑な教育活動について

・　委員より、臨地実習でのヒヤリハットの事例共有・改善策検討は強化してほしいとご意見があった。
今後も臨床との連携を図り、リスク感性が高められるよう支援を強化していく。

【乾副技幹】

配布資料に基づき、３．学生支援、４．入学生確保、５．社会貢献・地域貢献について報告

○学習支援について

・　受験者数減少への対応として、入学前からの学習習慣化と学力向上を目指す継続的な学習支援を強化したい。

・　退学者減少に向け、スクールカウンセリングの利用を勧奨し、保護者との面談等を通じ細やかな支援に

努めたい。

○感染対策（健康管理）について

・　対面授業 100%、校内クラスター発生０％、臨地実習８割以上の結果は、医療教育機関の取組みとして評価できるとの意見であった。

○学校運営について

・　アクションプラン活用による組織の運営方針統一化により学校運営の評価項目が全体に上昇した。教員の資質向上に向けて研修会の開催や参加等、計画的に実施した。

・　働き方改革では、ノー残業の徹底、テレワークや Skype 会議推進等、業務改善を行った。コロナ渦の教員のメンタルヘルス対策では、班体制による朝夕ミーティングでの業務調整、上司や同僚による声掛け等を重視した。

○就職支援について

・　複数回就職試験を受ける現状もあり、低学年からの就職支援を強化する。また、卒業後支援を継続していく。

○入学生確保について

・　大学進学率増加により一般入試の辞退者が増加している。指定校推薦、社会人入試増枠の対応を検討していく。

・　若年層への対応として学生主体のオープンキャンパス開催やインスタグラムを活用した。また、合格者のつどいは入学前の不安軽減につながり、次年度、更に効果的になるよう工夫していきたい。

○社会貢献・地域貢献について

・　学生と共につくる学校運営を目標に取り組んだ。ボランティア活動等、学生の主体性育成や学外者との連携は社会性を育む機会になる。今後も学生が生き生きと輝ける場を支援したい。

意見交換

○　以上の説明を受け、照川議長から「事前に委員の評価や意見を事務局で取りまとめ「評価委員会の学校評価案」欄に記載している。この欄に補足すべきことや、更なる提案をいただきたい。」との発言がなされた。

【荒瀬委員】

先ほどの説明で iPad で板書を無断で撮影する事例があったが、その行為は問題と言えば問題なのかもしれない。講師にとってはＮＧとなる人もいるのではないか。来年度は、学校側と相談しながら進めていきたい。学生に周知することも大切だと思う。

【照川議長】

iPad には動画が多く入っているが、学生は事前に動画を見て講義や演習に臨んでいるのか。

【近藤副技幹】

外部講師の方からは事前に授業資料が届き、学生には授業前日の夕方には配信し、予習をすることを求めている。学生は手元の資料を持ち、説明を受けながら授業や演習を行う。学生からは資料が手元にあることで分かりやすいと聞いている。必要な場合、動画視聴も事前課題にしている。資料が iPad にあることから、実習先でも活用でき学習効果につながっている。

【長谷川委員】

今年から授業を担当しているが、演習と座学を半分で講義した。座学に比べて演習は内容が難しかったのか

も知れない。授業動画の配信が直前になってしまうことが多かった。

【近藤副技幹】

今年度から新カリキュラムとなり、講師にはリハビリテーション各論で講義の後、実習室で演習を行う新しい取り組みを行った。

【長谷川委員】

量が多く、２コマに収めるのが厳しかった。学年によりレベルも違うので、来年も工夫をしていきたい。

【照川議長】

ICT の推進は、学校側先生の準備が大変だったと思う。教員は教科書を使う世代なので、iPad の設定など苦労したのではないか。

【布施主査】

コロナ禍で、ICT の推進が全国的に進んだと思うが、本校でも電子カルテや、看護技術のオンライン教育ツールを積極的に取り入れた。その取り組みの中で、iPad 操作や電子教科書を使うことに不安があったが、電子教科書の業者のオリエンテーションや、操作に慣れた職員もいるので ICT 委員会を発足し、委員中心に授業での使い方を研究した。学生の中には、使い慣れない学生もいたが、慣れた学生が ICT 委員会を作り、学生間でコミュニケーションをとりながら便利な使い方や自宅での wi-fi 導入など教えあっていた。

【照川議長】

保護者の立場からは、どのように受け止められていたか。

【横井委員】

子どもの様子を見ていると授業前に動画や資料が送られてくることで、何回か視聴してイメージトレーニングの上、授業に臨んでいた。そのため、二重三重に分かりやすく見ることができ、とても良いと思う。iPad を使い慣れないので心配していたが、同級生の中に大学卒業の方がいたため操作を教えてもらい、使い方に困らなくなったように感じた。

【照川議長】

その他教育活動について意見はあるか。

講師から「iPad での撮影などは、情報リテラシーの観点でルールづくりをしてほしいと思う。またシラバス（教授のポイント）を学校側から事前に教示してもらえると授業を作りやすい。」ということであった。情報リテラシーという部分は課題と思うので、来年度に向けても引き続きよろしくお願いする。

次に感染予防と臨地実習についてご意見はあるか。

【樋口委員】

コロナ禍で教員がいろいろな工夫をして、クラスターを起こさず臨地実習を行えたことは評価する。

当院は精神科なのでマスク装着が難しい患者もいるが、距離をとる、話す時間を短くするなどの対策について、臨床と教員との連携を密にしながら引続き実習を行っていきたい。

【照川議長】

具体的に学生に困ったことはなかったか。

【樋口委員】

他校の例でフェイスシールドを装着して実習に臨んでいたが、当院では全く使用していなかった。事前に学校と調整ができればよかった。

【小野塚委員】

実習を受ける病院側が患者さんとの対話などについて慎重になりすぎたところがあった。

御校の学生は、身だしなみも整っており、感染対策も学んできたと実習の中でも感じることが多かったので、安心して受入れできた。今後の感染対策については、５類になってからの病院内での対応を統一して学校に伝えていければと思う。

【照川議長】

ヒヤリハットの対応について、その場で対応することが難しいという意見が出た。学生のメンタルが心配という話もあったが、事例が発生した際のルートを説明してほしい。特に学生のメンタルケアに焦点をあてて説明してほしい。

【加藤副技幹】

ヒヤリハット事例が生じたときは、起きたことを否定するのではなく、再発防止策が考えられることを目標にその時の学生の状況、気持ちも考慮しながら、一緒に振り返るようにしている。また、臨床の方とも相談しながら行っている。散見される事例は、カルテを閉じずにその場を離れてしまうなど情報管理の部分、また一人で環境整備等を行ってしまうなど単独行動などである。学生カンファレンスで共有して振り返り、臨床の方と共有しながら対応している。

【照川議長】

実際に学生を受け入れしている立場として、ヒヤリハット事例の対応についてどのように感じているか。

【倉田委員】

御校の事例ではないが、患者の安静度を確認しないで歩行をしてしまったことがあった。

学生はやってしまった内容について、次の思考過程へすぐ動き出せないので、そこを解きほぐす対応も臨床側の仕事だと思っている。臨床側が捉えるインシデントの大きさと、学生が感じるインシデントの大きさには差があるので、事の大きさでかける時間も変わる。しかし、時間をかけて気持ちに寄り添って予防策に重点を置いてカンファレンスをする必要があると思う。

【照川議長】

学生も気持ちに寄り添ってもらうと安心すると思う。患者さんに気を向けなければいけない時にインシデントの方に気が向いてしまうので、臨床側のケアは学生にとってとても良い効果があると思った。

【照川議長】

次は、学校運営についてである。

学校運営に関しては、教員の努力がよく分かった。意見はあるか。

【吉楽委員】

報告書を見て、このコロナ禍で急な対応を求められることも多かったと推察する。また、迅速な調整が平時より多かったと思うがその中で教員の研修をしっかりしていることに、実習を受け入れている側としても安心であった。

【山内委員】

学校管理でも教員間のコミュニケーションが大切と思うが、朝夕ミーティングはどのような内容か。

【乾副技幹】

ミーティングは朝夕に行っている。朝は校長・管理課も含め全体でその日の予定、知っておく必要があることの確認や調整を行う。その後、班の内でも一日の流れの報告をしあっている。

夕ミーティングではやり残している業務の確認や、補助が必要か確認、調整して、時間外勤務が減るよう業務の整理をする会としている。

【山内委員】
業務の話だけでなく、雑談もしたら、組織的に一体感や相談もしやすいと思う。その辺を工夫したらどうか。
【乾副技幹】
学生の様子、発言など、その日に教員が感じたことを言えるようになってきている。
【照川議長】
次に、臨床では、働き方改革について訪問看護の看護師はどのような工夫をしているか。
【遠藤委員】
在宅で過ごす利用者が増えており、ストレスをどう解消するかが課題。
訪問看護では月～金の勤務の後、24 時間 oncall 対応もありとても過酷である。電子カルテの導入や医師との連携も電子化してきており大変苦労をしている。ノー残業や、業務改善のすすめ方など教えてもらいたい立場である。
ハラスメント研修会で、パーソナリティ障害の対応についてもぜひやってほしいと言ったのは、弱い立場の学生が怒られたり、怒鳴られたりする場面が多いのではないかと危惧している。真に受けて、傷つかなくていい場面で委縮してしまう場面が心配である。
最近パーソナリティ障害をベースに持っている方がいる。患者だけでなく家族にもいると感じる。特徴を理解したうえで、こういう対応は逃げていい対応なのだと、学生のうちから知ってほしい。
【照川議長】
学生は実習では、評価される側で、縮こまっていることが多いのかもしれない。
パーソナリティ障害を持つ方の対応は、判断が付きにくいものなので教員が見極めてほしいと思う。
【吉楽委員】
多くの看護師は、同僚や多職種や家族から強く言われると、自分のせいにしがちである。当院の看護部でもハラスメントについて学び、どのような事例が該当するのかハラスメントへの感性をあげる取り組みをしている。
学校では、ハラスメントについて授業はあるか。
【布施主査】
実習要項や学生便覧にも記載しているが、なかなか学生は、自分のこととして捉えてきれていない。今年度は１・２年生の学生に実習前に話をしてグループワークを試みた。「ハラスメントとは何か」を考え、きちんと話し合いをできる土台作りとハラスメントへの感性を磨いてほしいと伝えている。
【吉楽委員】
学生に向かい合う教員の体調管理は大事だと思うが、時間外はどれくらいか。
【長岡校長】
時間外を削減するため、業務改善の話し合いをした。様々な取り組みも試行し、声を掛け合いながら、勤務時間終了後、すぐ帰るように努力している。
【吉楽委員】
学生にも仕事を時間内に収めることを、今のうちから身に付けてもらいたい。
【照川議長】
自分も経験があるが、自宅での授業案作成が大変だった。学生には有効に時間を区切って、仕事をできる人になってほしいと思う。
ハラスメントについては、学生の意識付けや、教育の中で言ってもいいこと、口に出して言えなくても近く

の人に相談ができることが大切だと思う。

【長岡校長】

最近、看護学校での教員によるアカデミックハラスメントが報道で取り上げられた。

私たちの教育現場は命を守り、命に直面する専門職業人に教育しなくてはならないため、看護教育は厳しいと思う。学生とコミュニケーションをとり分かりあいながら専門職として育て上げたいと思っているがうまくいかない時もある。常に学生とコミュニケーションをとり解決したいと思っている。また、教員にも研修を重ね対応能力を上げることをしている。時に、学生から私たちの対応について意見をもらうこともある。そのようなときは双方の話をじっくり聞いて対応している。また、権利を主張することが解決にはならないことも併せて指導している。そのため、学生にも発した言葉に責任を持つことが必要だと思っている。また、同時に教員のメンタルヘルスについても考える必要があると思っている。

【照川議長】

学生支援についてはいかがか。

【山内委員】

学校祭は　地域の人、高齢者との交流をすることでコミュニケーション能力が高まると思うのでいいことだと思う。その交流を通して、自分にもできることがあると思い、自己肯定感が高まる機会にできるといいと思う。もっと地域の大勢の人と交流出来たらよかったと思った。

【横井委員】

学校祭に参加したが、コロナ制限下でも学生が生き生きとして、楽しんでいる様子が伝わってきた。学生主体は確かだが、教員が裏で盛り上げているのを感じた。学生と教員との関係性が良いと感じた。学生から基本的挨拶ができていて、声を掛けられたりして部屋に入りやすく、学生が学校祭を楽しんでいたのが、保護者的にもよかった。

【照川議長】

学校案内（パンフレット）も新しくするとのことで、学生が楽しそうな写真を載せられたらいいと思う。

【荒瀬委員】

自分の経験から、医療に関心がない高齢者に血圧などの話をし、聞いてもらうことで自分が大事にしてもらえているというよい経験になった。一般の方と触れ合い、改めて医療者になるという自覚を再認識する良い機会になると思う。専門学校で部活動がないので、学校祭は熱を入れられる場として非常に魅力的と感じるのではないか。また、この学校に来ると学生の挨拶がよい。ぜひ維持してほしい。

【照川議長】

学生支援については就職・経済支援に関して昔と変わってきていると思うが、県の奨学金は増えているか。

【木村主任主事】

近年傾向としては日本学生支援機構の給付型が令和２年度から始まり、本校の学生も利用をしている。給付型は１割程度、貸与型と重複して利用する者もいるので実人数は答えられないが、割合はそうなっている。

【照川議長】

給付型は条件が厳しい。奨学金だけで学校へ通えるように、奨学金の支給金額が増えるとよいと思っている。

経済的理由で退学した学生はいないか。

【木村主任主事】

いない。

【照川議長】

就職に関してはどうか。

【小野塚委員】

以前は急性期に人気があったが、最近の学生はやりたいことを決めてくる人が多く、臨床としては色々な人を受け入れたいと思っている。実際には、就職先との相性を考えて推薦していると思うが、どうか。

【長岡校長】

就職先の選択については、教員が学生とキャリアカウンセリングを行い、ミスマッチを避けるようにしている。長く働いてほしいと考えているので教員も面接などで丁寧に対応している。

【樋口委員】

新卒で精神科に入ると身体的な疾患が少ないので、身体を学ぶ機会がないと思う学生がいる。就職した方には、丁寧にサポートをするが、身体疾患で入院する患者がいないので限界がある。そのため、県立病院機構の他の一般病院と交流して、身体疾患を看る力をつけていくことは可能である。何が何でも精神科ではなく、一般科も学んでから精神科という選択肢もある。

【照川議長】

在宅では、新卒の受け入れはどうか。

【倉田委員】

在宅は一人で訪問に行き判断しなければならない、命に直結するところがあるので新卒者では厳しい。一般病院を経験してから在宅が良いと思う。

【照川議長】

入学生確保について。オープンキャンパスや Instagram など新しいやり方を取り入れている。学生の力が大きいと感じた。卒業生としていかがか。

【倉田委員】

卒後だいぶ経つので在学していた頃と環境が全く違う。

最新のことを取り入れながら学生生活をよりよくと教員も頑張っている。実習を見ていると教員と学生の距離の近さが魅力である。大学にはない専門学校でなければできないきめ細かい対応やこの良さをオープンキャンパスなどでアピールしてほしい。

【吉楽委員】

ホームページは改変する予定はあるか。

【木村主任主事】

県のホームページの枠組みで作成をしており、見かけのおしゃれさより、だれにでも情報を得られることを重視している。そのため、デザインに制約がある。写真を多く、動画をアップするなど、若い人の目を引くものが作れない。しかし、制約がある中でも、来年度は魅力を感じてもらえるホームページを作りたい。

【吉楽委員】

大学に入学生が流れがちということだが御校を卒業して、こんな風に活躍しているという情報があってもよいのではないか。活躍している先輩方の情報も掲載したらいいと思う。

【長岡校長】

卒業生の活躍を載せるのもいいと思う、是非、参考にさせていただく。２年後、当校は創立 50 周年を迎える。そこで、広報の仕方を再検討したい。またホームページの充実を計りたい。

【長岡校長】

奨学金の受給状況について補足させていただく。令和２年度頃から給付型、貸与型、給付型及び貸与型の重複など何らかの形で奨学金を利用している学生は３割程度になった。それまでは 15%程度だったので、倍になった。

○　意見交換後、令和４年度の全体評価として、学校運営はおおかた問題なく実施できていると総括された。

○　長岡校長より謝辞を述べ、閉会。